

ヘリングさんと古本屋

八木, 福次郎 / YAGI, Fukujiro

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / 経済志林

(巻 / Volume)

76

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

59

(終了ページ / End Page)

61

(発行年 / Year)

2009-03-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003901>

【紹介】

ヘリングさんと古本屋

八 木 福次郎

私がアン・ヘリングさんとお知りあいになったのは、はっきりとは思いだせないが、私のだしていた「日本古書通信」に始めてお名前がでたのは、昭和四十五年八月号であった。それは、「手に入れた本の話、古書展のあとで」という座談会で、出席者は、ヘリングさん、太田臨一郎、小門勝二、徳永康元、松本克平さんの五人、古書即売展の常連で、古書展のあとでよく私の社の編集室へ寄られた人達であった。何がしかのお金をお渡しして、古書展で目ぼしい本を買って頂き（お渡しした金額の範囲内とは限らない）、古書展のあとで獲物についての話や、古書展についてのご意見などを話してもらう座談会であった。この座談会記事を今回久しぶりに読み返してみたが、なかなか面白い試みであった。

この座談会でヘリングさんは、日本にきて五年、文楽人形芝居が始めてアメリカで上演されたのはシアトルで、そのとき私はシアトルの大学生、太夫の語る言葉が理解できないのを恥しく思って、早速日本語、日本史を専攻するようになった。来日されて五年、その頃既に日本語はペラペラ、奈良の春日神社の仕事もしている、ということも話されている。日本人でも文楽の太夫の語る言葉は充分理解できないのに、アメリカの大学生が理解できなかったのは当然で、来日五年で座談会でこうして会話される語学力は大したものである。

この談話によると、ヘリングさんを知ったのは、来日されて間もなくからであったようだ。その頃であったか別な時か、外国人がよく行く神社の御籤を英文で作ることを提案していると話されたことがあったが、それは春日神社の御籤であったかもしれない。それが実現したかどうか知らないが、こういったアイディアを思いつかれるのは早かった。

日本の昔話や、チリメン本、千代紙、立板古など、日本で忘れ去られようとしているものを発掘して紹介されたことも多い。私が戦後間もなくの昭和二十二年に、千代紙文庫という和紙に木版刷りのさゝやかな詩集をだしたことがあったが、それをヘリングさんに差上げたところが、機会あるごとに紹介して下さった。この度の座談会でも千代紙文庫について発言されているし、日本放送出版協会発行のNHKの“美の壺”の「千代紙」のなかでも紹介して下さっている。チリメン本については情熱的に研究された。収集されたチリメン本の数、日本の収集家のなかでも最多でないかと思う。チリメン本の古書価が値上りしたのはヘリングさんの収集が刺戟になったのではないだろうか。「日本古書通信」にもいろいろと寄稿して頂いたが、「縮緬本雑考」は十九回の連載で一番力を入れておられたようだ。

日本史を専攻されただけあって、漢字や変体仮名もよく読まれた。日本人顔負けで、何々天皇の何年に、と古い話がポンポンとでて、日本人の私が恥かしい思いをすることもあった。私も会員であった武井武雄の刊本作品の頒布会にも親類（会員）として出席されていたが、ある時、お子さんのみどりちゃんをつれて出席され、一緒にマイクの前で、この子は丙午ひのえうまの生まれですが、男の子を殺したりはしないおとなしい子供です、と話された。丙午という言葉は近頃あまり口にしなくなっている。みどりちゃんが丙午生まれだとすると昭和四十一年（一九六六）で、この話をされたのは昭和四十五、六年のことだったかもしれない。こんな言葉が自然にでてくるような日本通で、文楽人形浄瑠璃やお伽草子の原本の変体仮名を読まれるのには驚く。

それから大分あとのことであったが、アメリカの西海岸にある火山のセ

ントヘレンズが爆発したことがあった。ヘリングさんの伯母さん（？）の家がその近くであって、屋根に積った灰落しにアメリカへ行く、と喫茶店で話された。ヘリングさんは酒はいけるが何故かコーヒーは飲まれない。ジュースか何かを飲みながらの話であった。あなたが屋根の灰落しに行かれるよりも、飛行機代で人を頼んで灰落しをして貰った方が安上がりでしょう、そんな話などをしているうちにしみじみとした話になって、みどりさんはその伯母さんの家に世話になっている、その伯母さんが亡くなったので、未成年の女の子が一人にいることはできなくなったので、そんなこともあって行く、と話された。武井さんの会で丙午のスピーチをされてから十年ほど後のことである。現在はみどりさんも四十歳を過ぎている計算で、私とヘリングさんとのお付き合いも四十年以上ということになる。現在の大学でのご専門のことは知らないが、私とは専ら古書にまつわる話であった。

児童文学などの国際会議に、日本代表として外国へ行かれたこともあって、日本人でない私が日本代表として出掛けるのはおかしいが、といって出かけられたこともあった。

古書展や何かの会にお菓子などを差入れされたり、私の社の若い人が結婚した時や、大阪の浪速書林の梶原君が結婚の時も大阪まで出かけていって祝辞を述べたりもされたり、私の誕生日に祝電を頂いて恐縮したこともあった。そんな気配りをされる人である。

夕方来られてつい長時間話しこまれ、小柄な体で両手に重そうな荷物をぶらさげて駅まで一緒に歩いて歩いたことがあった。荷物を持ちましょうか、といっても自分で持って歩かれた。荷物はいつも本であった。欲しいとなると、その時金がなくても買われる。近頃、古本屋さんに借りがあって、神田の古本屋さんは敷居が高い、と云われ、訪ねてこられることが少なくなった。学校の方がお忙しいこともあるのだろうが、この度退官されると時間の余裕もできるのではないかと思う。永年蓄積された資料をまとめて発表されることを期待しています。神保町の古本屋歩きや、古書展へもお出で下さい。どうぞいつまでもお元気で。